NEIGHBOR

vol.587
〜
vol.589

CROSS×TALK 特別企画

吉田育英会に息づく
ＹＫＫの『善の巡環』

〜それぞれの夢を それぞれの未来へ〜

「夢は起きているときに見たいもの」
YKK創業者であり吉田育英会の設立者である吉田忠雄は
かつてこのように語りました。

吉田忠雄が
財団設立時に抱いた「夢」とは何か――。

この度、吉田忠裕理事長は
吉田忠雄の「夢」を紐解き
50余年にわたる財団の歴史と
自身の経験を振り返りながら
吉田育英会にかける自らの想いを語りました。

YKK PR誌『NEIGHBOR』の
2023年1月号から3回にわたり掲載された
吉田理事長の言葉をここに採録します。

～それぞれの夢を それぞれの未来へ～

「若者の夢を未来につなぐことこそが、私たちの夢」と語る
吉田理事長の言葉を通じて
吉田忠雄の「夢」と
YKKの企業精神『善の巡環』が
現在の吉田育英会の活動のなかに
いかに脈々と息づいているかを感じてもらえれば幸いです。

吉田育英会のルーツにある『善の巡環』とは

YKKの創業社長、そして吉田育英会の設立者である吉田忠雄は、少年時代、ある一冊の本に心を揺さぶられます。

それは、鉄鋼王として米国で大成功をおさめ、慈善活動家としても名を馳せたアンドリュー・カーネギーの自伝でした。社会への貢献活動に努めたカーネギーの半生に、いたく感動した吉田は、のちに「他人の利益を図らずして自らの繁栄はない」というYKKの企業精神『善の巡環』に至ります。

YKKの事業を通じて、世界を視野に入れることになった吉田忠雄は、国際舞台で活躍できる人財を広く育成、教育することこそ重要であるとの強い想いを持つことになります。

吉田育英会の活動は、YKKの企業精神『善の巡環』のもとに実践される、一つの社会貢献活動の形です。1967年の設立以来、奨学支援を行った前途有為の人財は、3,800名を超えます。

そして、設立者吉田忠雄の想いは、50余年を経た今、多くの奨学生や会友（OB・OG）の皆様による様々な分野でのご活躍を通じ、世界で大きく結実しています。

吉田育英会設立者・吉田忠雄（YKK創業社長）略歴

1908年　富山県魚津市に生まれる
1934年　YKKの前身となるサンエス商会を東京・日本橋に創業
1945年　東京大空襲により魚津に疎開、再興を図る
1954年　富山県黒部市にファスナー一貫生産工場建設着手
1959年　ニュージーランドに第一号海外現地法人を設立
1961年　アルミ建材の生産・販売を開始
1974年　米国ジョージア州メーコン市で海外初のファスナー一貫生産工場稼働
1984年　社長として創業50年を迎える
1993年　逝去（84歳）

丸屋根展示館
YKK黒部事業所内のYKKセンターパークに建つ展示施設。かつての工場をリノベーションした館内には、YKKグループのものづくりの技術・歴史と共に、創業者吉田忠雄の考え方や人生を紹介するコーナーがあり、奨学生が研修旅行の一環で見学しています

吉田育英会に息づく
YKKの『善の巡環』
～それぞれの夢を それぞれの未来へ～

今から半世紀以上も前に
YKKの創業者 吉田忠雄は
『吉田育英会』という奨学財団を設立しています。

自ら提唱した『善の巡環』を
YKKの企業精神に位置づけた創業者は
自身の生涯においても終始
善なるものを探求し続けました。

そして、長い人生の道程のある瞬間に
国際的な教育財団の設立を通じて
世界の若者たちを支援することを思い立ちます。

創業者の熱い想いを動力に
吉田育英会が誕生したのは1967年のこと。

一方で、YKKにとっては、1960年代は
いったいどのような時期だったのでしょうか。
一言でいえば、怒涛の時代でした。
大きく飛躍すべく海外進出への
挑戦を本格化させたのが
まさしくこの時期だったのです。

それだけに、まだまだ成長過程にあった
当時のYKKの事業規模において
奨学財団をつくるという判断には
相当な決意と覚悟がともなったはずです。

では、なぜそのような状況下で
創業者は迷うことなく
吉田育英会の設立に邁進したのでしょうか。

そこには、いくつかの理由があります。
まず創業者自身が教育問題に対して
何ものにも替え難いほど熱い想いを持っていたこと。
同時に、YKKの海外展開が加速するなかで
世界の舞台で活躍できる人財の育成が
急務だという気づきがあったからにほかなりません。

夢は起きているときに見たいもの――。

国際的な奨学事業の構想についての考えを
説明する際、創業者は嬉々として
そのように語ったといわれます。

つまり、世界へ飛翔していく若者を
バックアップする吉田育英会の設立は
創業者が思い描いた大きな夢の一つでした。

次項からは、その想いと夢を引き継いだ
理事長の吉田忠裕の言葉を通じて
同財団の意義について紐解きます。
『善の巡環』に込められた想いが
社会貢献という形で具現化されるまでの
一つのプロセスをここにとりまとめることにします。

吉田育英会に息づくYKKの『善の巡環』
～それぞれの夢をそれぞれの未来へ～

誕生からすでに半世紀以上 吉田育英会に息づく熱い想い

吉田育英会の理事長という立場から、私の想いをお話しいたします。

今に始まったことでは決してないのですが、昔から私は奨学財団としての当会のことを頭に思い浮かべると、なぜだか自然とあたたかな気持ちが湧き起こってきて、いつのまにか笑顔になってしまうんです。どうしてそういった心情になるのかを自分なりに分析してみると、今さらながらに思うことがありました。

それは、当会の活動自体が、『善の巡環』に込められた創業者の想いを、そのまま体現しているからだと思うのです。これは、母体となるYKKにとっても、たいへん喜ばしいことです。つねに事業の軸に置いてきた企業精神を、教育支援という純然たる社会貢献の形で具現化できているわけですから、そこには何ものにも替え難い大きな価値があります。何よりも、未来に向かう若者を支援する財団の設立は、創業者自身が思い描き続けてきた夢でもありました。

事実、語録集である書籍『「なしたもんだ」の経営』には、国際的な奨学財団をつくる計画について言及した言葉があり、その一節で、創業者は「夢は起きているときに見たいもの――」と語っています。また、同じ記述のなかで、「世界の若者たちを育て、世界の限りない平和を願うための〝YKK財団〟」という言葉で財団のあり方にふれていたことも、今思えば非常に示唆的でした。

さて、そんな創業者の熱い想いのもとに当会が誕生したのは、1967年3月27日のこと。振り返ってみれば実に55年と、すでに半世紀以上のときを重ねてきたことになります。

ただし当初のプログラムは今とは異なり貸与型で、対象も富山県の学生が中心でした。その後、対象を日本全国はもとより、世界へと広げながら、プログラムも随時刷新。貸与型から給付型へと移行したほか、時代の移ろいと共に、大学院生や日本人留学生、受入留学生へと対象の中心を変遷させていくことになります。活動の多様性や国際性を高めてきたことも、当会の大きな特徴といえるでしょう。たとえばカーターセンター*1へのインターン奨学生派遣やフルブライトプログラムへの協賛といった取り組みにもこうした独自性は現れています。半世紀以上にわたる歴史のなかで支援した奨学生の数も3800名を超えました。そして、今なおその輪が広がり続けていることも、嬉しいこととしてお伝えしておきます。

目を輝かせて語る その想いこそが未来への扉

理事長として組織運営に携わるなかで、私自身も、当会の確かな価値を強く実感することがあります。それは、式典やイベントなどを通じて、夢に向かって進む奨学生や会友（OB・OG）の皆さんと直接お会いする機会に恵まれたときなんですよね。そんなとき、私は「どんな学問に取り組まれているのか」を興味津々でうかがうのですが、分野もテーマも実に多種多様。話は生命科学や量子物理に及ぶこともあれば、国際法や社会学、あるいは国際ボランティアに及ぶこともあります。唯一共通しているのは、皆さんが一様に目をキラキラさせて話をしてくれることでしょうか。

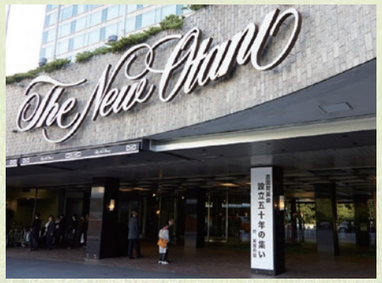
私の記憶のなかで、もっとも数多くの輝く笑顔に出会えたのは、やはり2017年11月に設立50年を祝して開催された記念式典ですね。それぞれの世界で挑戦を続ける皆さんの姿をこの目で拝見して、まるで我がことのように誇らしく思ったことを今も鮮明に覚えています。

翌年の春には、奨学生や会友同士のコミュニケーションを醸成する交流事業の一環として、『環（WA）』という会報誌を発刊したのですが、この本のサブタイトルは『それぞれの夢をそれぞれの未来へ』としました。この言葉は、私どもの純粋な気持ちを表すと同時に、当会に捧げられたものでもあると思っています。なぜなら今や奨学生の皆さんの夢を未来につなぐことは、吉田育英会の夢でもあるからです。当然、こうした私どもの想いは、かつての創業者の願いを受け継いだものです。いろいろお話しましたが、これからも当会の活動の通じて皆さんの夢を形にするお手伝いができればと心から思っております。（つづく）

設立50年を記念して発行された会報誌『環（WA）』。サブタイトルは『それぞれの夢をそれぞれの未来へ』

*1 カーター・センター　アメリカ第39代大統領ジミー・カーター氏が設立。世界各地の紛争解決と予防、疫病の撲滅と管理をテーマに様々な活動を展開

YKK（株）／YKK AP（株）相談役　YKK不動産（株）会長
吉田 忠裕（よしだ・ただひろ）**氏**
1947年富山県魚津市生まれ
慶應義塾大学法学部卒業
米国ノースウエスタン大学経営大学院（ケロッグ）経営学修士（MBA）取得
1972年YKK（株）（旧吉田工業（株））入社
1980年専務取締役　1985年取締役副社長
1990年YKK AP（株）
（旧 YKKアーキテクチュラルプロダクツ（株））代表取締役社長
1993年YKK（株）代表取締役社長
2011年YKK（株）／YKK AP（株）代表取締役会長CEO
2018年YKK（株）／YKK AP（株）取締役
2020年YKK（株）／YKK AP（株）相談役
2020年YKK不動産（株）会長
（公財）吉田育英会理事長



2017年11月11日（土）には、設立50年を祝う式典がホテルニューオータニ（東京都千代田区）で開催されました。『吉田育英会 設立50年の集い』と銘打ったこの式典には、来賓や役員、奨学生や会友（OB・OG）を含むおよそ300人が参集。オープニングから懇親会まで会場は終始、あたたかなムードに包まれました

吉田育英会に息づく
ＹＫＫの『善の巡環』②
～それぞれの夢を それぞれの未来へ～

新たな価値の創造により
社会に『善』を尽くし続ければ
やがて『善』は、限りなく世界を巡ってゆく――。

ＹＫＫの創業者 吉田忠雄は
そのような考え方のもとに
自ら『善の巡環』を提唱。
この哲学をＹＫＫの企業精神とし
事業においても、自身の人生においても
つねに善なるものを探求し続けました。

１９６７年に奨学財団として
『吉田育英会』が設立されたのも
こうした創業者の熱い想いがあってのこと。

早い段階から教育支援に
大きな関心を寄せていた創業者は
『吉田育英会』の設立以前にも
いくつかの活動に取り組んでいます。

たとえば、１９５０年代に入ると
ＹＫＫの事業所内において
県立雄峰高等学校吉田学級を設けて
高校生たちに学びの場を提供。
さらに、ＹＫＫの全額負担で
働きながら高校の卒業資格を
得られる教育環境も整備しています。

幅広い教育支援に力を注いだ創業者ですが
そのなかでも、とりわけ熱く語っていたのが
国際的な教育財団をつくることでした。

これは当時の時代背景ともリンクする話です。
１９５９年のニュージーランドへの進出を契機に
１９６０年にアメリカ、１９６４年にオランダと
１９６０年代は世界での飛躍を求め
ＹＫＫが海外展開を一気に加速させた
まさしく怒涛の時代です。
こうした背景にともない
創業者は、今後の社会にとって必要なのは
国際舞台で活躍できる人財の育成だと考えました。

夢は起きているときに見たいもの――。

国際的な教育財団の可能性について語るとき
創業者はよくそんな言葉を口にしたそうです。
そして、ここで語られている
世界へ羽ばたく若者を支援する夢を
現在進行形で吉田育英会が叶え続けています。

では、半世紀を経て、夢の続きはどうなったのか。

次項からは、その哲学を受け継ぐ
理事長の吉田忠裕の想いを通じて
吉田育英会の今を紐解いていきます。

写真は、吉田育英会の研修旅行の一幕。YKKの原点であり、重要な製造開発拠点がある富山県黒部市を巡った

吉田育英会に息づく YKKの『善の巡環』②
～それぞれの夢をそれぞれの未来へ～

波紋のように広がる善きこと 人の幸せにつながる取り組みを

今、お話しした私の考え方の根源をさかのぼれば、もちろん、そこにはYKKの企業精神『善の巡環』があります。

YKKの創業者は、「新たな価値の創造により社会に『善』を尽くし続ければ、やがて『善』は限りなく世界を巡ってゆく」という、いわば壮大な円環のイメージから、この独自の哲学を生み出しました。奨学財団としての吉田育英会の活動は、この『善の巡環』を非常に純粋な形で具現化したものともいえるはずです。

一方で私のなかにも、固有の『善』のイメージがあります。ときどき周囲にも話すのですが、「善きことには、波紋のように広がっていく力がある」という想いを私は持っています。ですから、世の役に立ちそうなことがあれば、どんどん発信していくべきというのが私の持論です。

そういう意味合いからも、皆さんにも新しい研究や発想、あるいは活動など、自身が考える様々な善きことがあれば、ぜひ世界に投げかけていただきたいのです。確かに最初のアクションによって生まれる波紋は、小さなものかもしれません。ですが、少しずつ理解者や賛同者が現われて想いを共有することができれば、小さな波紋もやがて大きく広がっていくことでしょう。また、そのようにして、社会をよりよいものにする素晴らしい力が生じる瞬間に立ち会えれば、私どもにとってこれほど幸せなことはありません。

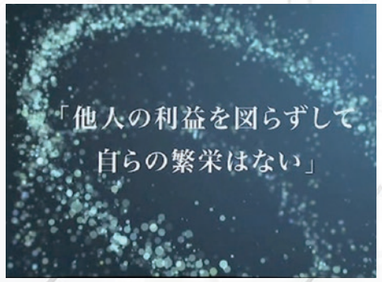
いろいろとお話ししてきましたが、大きな波紋をつくるにあたっては、吉田育英会のネットワークを有効に活用していただきたいですね。たとえば当会の交流会やイベントを通じて、多様な専門分野の奨学生や会友とつながることができれば、やがてはそれが花開くかもしれません。事実、当会での出会いを通じて分野を超えた共同研究が行われている事例もありますので、ぜひご活用いただけたらと考えます。

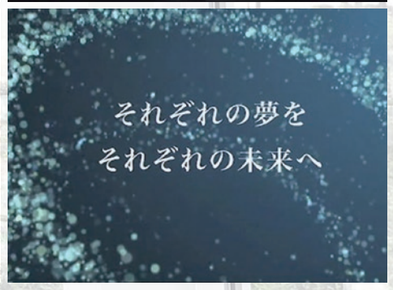
奨学生に対する交流事業の一環として行われている黒部への研修旅行。『善の巡環』のもとに、事業を実践してきたYKKの歴史に、奨学生たちも興味津々の様子

交流会でネットワークをつくり ぜひとも新たな可能性の扉を

1967年の3月27日に誕生した吉田育英会は、すでに半世紀のときを刻み、長い歴史のなかで支援した奨学生の数も3800名を超えました。

2017年には、設立50年の記念式典を行い、そのオープニングにおいては、創業者の当会への想いをビジュアル化したスペシャル映像を公開。『善の巡環』につながる円環のイメージのもと、グローバルな人財の育成に対する創業者の熱い想いを表現した動画は、来場者の間で大きな反響を呼ぶことになりました。個人的には、ゆったりと回転するCGのなかに、キーフレーズである『それぞれの夢を それぞれの未来へ』が浮かび上がった瞬間に、たいへん深い感慨を覚えました。なぜなら、創業者が『善の巡環』のなかで実践してきた教育支援が、50年の歴史を祝う形で可視化されたように感じたからです。キーフレーズにもあるように、今や奨学生の皆さんの夢を未来につなぐことは、吉田育英会の夢そのものでもあります。同時に、いくつかの成長のステージを経たことで、吉田育英会の事業も広がりを見せていますので、奨学生や会友の皆さんには、積極的にネットワークに加わっていただき、新しい可能性の扉を開いていただければと思います。そして、それこそが理事長としての私の願いであり、夢でもあるのです。（つづく）





2017年に開催された設立50年を祝うイベントでは 善の巡環との関係をまとめた映像コンテンツを紹介

2017年11月11日（土）には、設立50年を祝う式典がホテルニューオータニ（東京都千代田区）で開催されました。『吉田育英会 設立50年の集い』と銘打ったこの式典には、来賓や役員、奨学生や会友（OB・OG）を含むおよそ300人が参集。オープニングでは、半世紀にわたる歴史を振り返る記念映像『吉田育英会の歩み』も上映されました。映し出されたのは、1967年の設立から現在に至る経緯と、そのなかで紡がれてきた様々な想い。『それぞれの夢を それぞれの未来へ』というコピーが静かにスクリーンに流れ、エンディングを迎えると、会場はあたたかな喝采に包まれました。

吉田育英会に息づく YKKの『善の巡環』③

～それぞれの夢をそれぞれの未来へ～

今からさかのぼることおよそ半世紀以上も前のこと。

YKKの創業者 吉田忠雄は
1967年3月27日に
自身のなかで温め続けてきた
一つの熱い想いを具現化しました。

その想いとは、自ら提唱した
YKKの企業精神『善の巡環』のもとに
国際的な教育財団を設立すること。

それが、ここで紹介する吉田育英会です。

しかしながら、この奨学財団が誕生した1960年代は
YKKにとって、まさしく怒涛の時代。
1959年のニュージーランドへの進出を契機に
1960年にはアメリカ、1964年にはオランダと
海外展開を一気に加速させたのが、この時期でした。

当然、チャレンジのために必要な原資も限られており
そんななかで財団を設立することには
相応のリスクを覚悟する必要もありました。

しかし、創業者のなかに財団の設立を
ためらう気持ちは、微塵もありませんでした。
むしろ、世界に打って出る今だからこそ
国際舞台で活躍できる人財の育成が
急務であると創業者は考えたのです。

夢は起きているときに見たいもの――。

語録集『「なしたもんだ」の経営』のなかで
創業者はそう語り、さらに「世界の限りない平和を
願うための〝YKK財団〟」と自身の理想を綴っています。
つまり、国際的な教育財団の設立は
創業者が生涯、抱き続けた夢そのものだったのです。

そして、その夢を引き継いだのは
「善きことには、波紋のように
広がっていく強い力がある」と語る吉田忠裕理事長。

半世紀以上ものときを重ねてきた
吉田育英会をどのような考え方で
理事長が引き継いだのか――。
ここでは、若者たちの夢を未来につなげるための活動に勤しむ
吉田育英会への理事長の想いをとりまとめることにしました。

吉田育英会に息づくYKKの『善の巡環』③
～それぞれの夢をそれぞれの未来へ～

知見の扉を開き、新たな世界へ 今一度、学問の大切さを再考する

夢は起きているときに見たいもの――。

YKKの創業者 吉田忠雄は、国際的な教育財団の構想について語るとき、好んでこの言葉を用いました。語録集『「なしたもんだ」の経営』には、前述の表現に加え、「世界の若者たちを育て、世界の限りない平和を願うための〝YKK財団〟」という言葉で、進むべき方向性についても指し示しています。同時に、言葉の力強さから、世界へ羽ばたく若者たちの教育支援を、創業者がいかに切望していたかがおわかりいただけるはずです。そういう意味では、すべての着想の根幹にあるYKKの企業精神『善の巡環』と、創業者の並々ならぬ熱意が相互に作用することで、はじめて吉田育英会は誕生することができた……といっても過言ではないかもしれません。

さて、ここで少し私の想いも、お話しさせてください。個人的に、学問の素晴らしさというものは、様々な知見の扉を開くことで、新しい世界に出会えることだと考えています。そこには物理や化学、あるいは生命科学の扉もあれば、政治、経済、哲学、文学……など様々な分野の扉があることでしょう。当然、どの扉から入るかで、見えてくる風景は変わりますが、共通することも数多くあります。たとえば、どのような分野であれ、そこには世界を深く理解するためのヒントが必ず存在していますし、好きな学問を極めるなかで多くの出会いに恵まれればその方の人生は豊かで色鮮やかなものとなるはず。これらは、すべての学問に共通することといえるでしょう。そして最後にもう一つ、探求のプロセスで見えてきたものを通じて、自分自身と深く向き合えることも、学問の大きな魅力の一つだと思うのです。

いろいろ言葉を重ねてきましたが、ここまでのお話は、実は私の個人的な体験と結びついています。私も1970年から2年間、ノースウエスタン大学経営大学院（ケロッグ）に留学し、マーケティング理論を学んだ経験があるんです。このときに師事したのは、近代マーケティング理論の礎を築いたフィリップ・コトラー教授。まだ39歳の若さながら、教授はすでに独自の理論を体系化した大著『マーケティング・マネジメント』を出版され、第一線で活躍されていました。同書のなかで、教授が何よりも重視していたのは、顧客のニーズに徹底的に応える『One to One マーケティング』という考え方です。

マーケティング分野の始祖であるコトラー教授のもとで学んだ、留学時代の理事長

当然、講義を通じて私もその薫陶を受けることになったのですが、不思議だったのは、時代の最先端をゆくマーケティング理論を、まだ若輩者だった私がさしたる戸惑いも感じず、ごく自然体で受けとめられたこと。「なぜだろう?」と思い、何度か直接お話をうかがったところ、あるとき、教授の理論の本質が「顧客の要望の先に存在する、より広範なステークホルダー、もっといえば社会全体を豊かにすること」だと直感的にわかったんです。その瞬間からですね。自分のなかですべてがつながり出したのは……。

つまりコトラー教授の講義を戸惑うことなく私が受け入れられた理由は、そこで提唱されるマーケティング理論と、『善の巡環』の間に驚くほど数多く符合する点があったからなのです。ここでの教授との交流についてはいずれまたしっかりと記述する必要がありますが、以来、留学中の私は、「最先端のアカデミアの理論を通じて、自分のアイデンティティーの根源にある哲学を深くとらえ直す」という作業に没頭することになりました。

無論、ここでのお話は私個人のエピソードにすぎませんが、奨学生や会友（OB・OG）の皆さんも学問を探求するなかで、特別な気づきや出会いに恵まれる瞬間が必ずあるはずです。断言しますが、そのときに得たものは、間違いなく人生における最高の宝物の一つになりますので、ぜひ大切にしていただきたいですね。

半世紀のときを重ねるなかで より時代に求められる奨学財団へ

今回のテーマを、奨学財団としての国際性や、『善の巡環』との近似性ということで考えたとすると、どうしてもう一人、ふれておかなければならない方がいらっしゃいます。

それが、第39代アメリカ合衆国大統領のジミー・カーター氏です。ご縁が始まったのは1970年代初頭のこと。YKKがジョージア州メーコン市で新しい工場を稼働させた当時、同州の知事を務めていらしたのがカーター氏でした。その後、大統領に就任されるわけですが、退任されてからは平和・人権・飢餓・環境問題などの解決に向けた活動を行う非営利組織カーターセンターを1982年に設立。以後、世界70カ国以上で平和活動を展開し、2002年にはノーベル平和賞を受賞されています。とりわけカーター氏と創業者の親交は篤く、2008年に開催した『YKK創業者吉田忠雄 生誕100年感謝の集い』には、「初めて『善の巡環』の説明を受けたときには、たいへん深い感銘を覚えました。この理念を次の世代へ継承すると共にぜひさらに高めてほしいですね」というメッセージを贈っていただいています。当会も、1997年に初めてカーターセンターにインターン派遣を受け入れていただいて以来、四半世紀以上にわたって様々な人的交流を重ねてきました。

ネパールの復興支援に参加したカーター氏。現地の家族とのふれあいに笑顔がこぼれる

設立から早56年。当会は、時代に必要な支援を探求しながら、プログラムや交流事業を拡充してきました。設立50年を迎えた2017年からは、新たなキーフレーズとして「それぞれの夢をそれぞれの未来へ」を加えて活動をしていますが、もちろんすべての着想の中心にあるのは、創業者がつねにそうであったように、『善の巡環』です。私自身も、善きことには波紋のように広がっていく強い力があるものと信じていますので、これからも『善の巡環』のもとに活動を続けてまいります。皆さんの夢を未来につなげることこそが、私共の願う未来であり夢です。この想いは、今後も決して変わることがありません。（了）

会報誌『環』（創刊号）では、カーターセンターでのインターンを経てAAR japanで社会活動に従事する梶野杏奈さんの記事を掲載（2017年の取材当時）。スーダンにおける環境衛生の改善と地雷撤去対策のほか、アフガニスタンにおける帰還民プログラムに参加した際のお話をうかがった

NEIGHBOR［ネイバー］

Yoshida
Scholarship
Foundation

公益財団法人 吉田育英会

http://www.ysf.or.jp

発行日／2023年3月1日　発行／公益財団法人 吉田育英会　〒130-8521 東京都墨田区亀沢3-22-1 YKK60ビル内
編集／株式会社 千広企画